

ユートピアのなかの女性

エドワード・ベラミー 『かえりみれば』

(Edward Bellamy on the Woman in the Utopia of *Looking Backward*)

丹 治 陽 子

【はじめに】

エドワード・ベラミー (Edward Bellamy) が『かえりみれば』 (*Looking Backward, 2000-1887*) を発表したのは、1888 年のことである。20 世紀末の未来社会を描写するこのユートピア小説は出版後の 10 年間で 40 万部を売り、『アンクル・トムの小屋』と『ベン・ハー』に次ぐ、当時第三のベストセラーとなった。しかもそれは、たんに多くの読者を得たというだけではなく、公刊後、大きな社会的影響力をもつ著作ともなった。というのは、この小説をきっかけとしてアメリカ各地にベラミー・クラブと称する社会改革的クラブがつつぎと作られたからである。

ベラミー・クラブとは、このユートピア小説のなかで提示されている未来社会のしくみをもとに、理想的な社会像について議論するためのクラブであった。その意味で、『かえりみれば』は、実践的な社会改革的プログラムとして受け入れられた稀有なユートピア作品であった。この小説への批判的な反応として 2 年後に公刊されたウィリアム・モリスの『ユートピアだより』 (*News from Nowhere*) は、マルクス主義者であったモリスのマルクス主義的な思想の具現化として構想された共産主義的ユートピアを提示しているが、『かえりみれば』に認められた直接的、実践的な意味を認められることはなかった。

ところで、ベラミー・クラブには、シャーロット・パーキンス・ギルマンをはじめとする著名なフェミニストたちも名を連ねていた。そのようなフェミニストたちは、『かえりみれば』のなかの理想的な社会における女性像を議論の対象としていたのである。たしかに「女性の問題 (woman question)」^{ウーマン・クエスチョン}は、1880 年代における社会的な問題のひとつとして、この著作の重要な主題のひとつを形成していると見ることができるだろう。本論の目的は、このユートピア小説のなかに提示されている女性についての記述をとおして、ベラミーの女性観の特質を探ることにある。

【ふたりのイーディス】

物語は 1887 年 5 月 30 日月曜日にはじまる。「合衆国の統一保持のための戦争に参加した北部の兵士に敬意を表する」ための「戦没将兵記念日 (Decoration Day)」¹であるこの日、町には軍隊や市民の行列、音楽隊が繰り出し、南北戦争で亡くなった戦没者の追悼がおごそかに行なわれている。主人公ジュリアン・ウェストは、その戦争の戦没者であった婚約者イーディス・パートレットの長兄の墓参りを終え、彼女とその家族とともにタバを過ごしてから自宅で眠りにつくのだが、目を覚ますと 100 年以上タイムスリップをしていたことを発見するのである。

彼が目覚めたのは 2000 年 9 月 10 日のボストンである。彼が目覚ましかけたとき、「その方には言わないと約束してください」と言う若い女性の声をふくめて、3 人の男女の声が聞こえる。彼らは、ジュリアン・ウェストの発見者であるドクター・リートとその妻、そして娘である。ドクター・リートから妻と娘を紹介されたジュリアン・ウェストは、娘の美しさに目を奪われるとともに、彼女の名前が、偶然にも自分の許嫁と同じイーディスであることを知る。

ふたりの女性がともにイーディスという名前であることが意味していることとは何なのか、そして「その方には言わない」というイーディスが言っている秘密の内容とは何なのか、というふたつの謎は、『かえりみれば』に恋愛ロマンスとしてのストーリー的骨格をあたえることになっていく。このベストセラーの人気の理由は、合理的な社会システムに支えられたユートピアの提案にあることはもちろんであるが、このようなラブ・ロマンスの要素にもあることは忘れてはならない。

ふたりのイーディスの関係は 27 章にいたってようやく明かされる。それによれば、イーディス・リートは、イーディス・バートレットの「ひまご娘」にあたるということになる。

イーディス・バートレットは 14 年間わたしの喪に服したのち、立派な結婚をして、一人の息子を残したが、それがリート夫人の父だったのだ。リート夫人は祖母を見たことはなかったが噂はずいぶんきいていた。それで自分に娘が生まれると、その子にイーディスという名前をつけたのだった。おそらくこういう事実があったことも手伝って、その娘は大きくなるにつれ、自分の曾祖母に関するすべてのこと、ことに曾祖母が妻になることになっていた恋人が家の火事のために死んだらしいという悲劇的な話に強い関心を抱くようになった。(LB211)

要するに、『かえりみれば』は、19 世紀末から 20 世紀末へとタイムスリップしたジュリアン・ウェストが、19 世紀末に結婚する約束をして果たせなかった婚約者の「ひまご娘」と、20 世紀末において結婚するという、時をこえて成就された恋愛を物語るラブ・ロマンスでもある。ジュリアン・ウェストは、ユートピアという枠組みのなかで、たんに理想的な社会における女性のステータスを客体化して語るだけではなく、ラブ・ロマンスという枠組みのなかで、自己の主體的な経験として 19 世紀末と 20 世紀末のふたりの女性との関係を語っているのである。

そのことによって、ベラミーが女性の問題を、たんに社会改革者として客観的に論じているだけではなく、個人的な感情が投影できる主観的な形式で論じている——この小説における女性像を研究する場合、このような形式的な事実をあらかじめおさえておく必要があるだろう。そのうえで、イーディスという名を共有するふたりの女性を見てみよう。

【イーディス・バートレット】

ジュリアン・ウェストによれば、19 世紀後半のアメリカ社会は、相互の格差が大きすぎるために「4 つの国民」(LB37) と呼ぶほうがむしろふさわしいような 4 つの階級——すなわち、金持ちと貧乏人、有識者と無学者——から成り立つ顕著に階級的な社会である。

彼自身は、祖父が残した財産をもとに 3 世代が働かずに贅沢に暮らしてきたという家系の末裔であり、一度も職業を持ったことがなく、お金を稼いだこともないという 30 歳の青年であるが、当時の階級間の憎悪の深さを象徴するかのごとく、労働者たちへの怒りを表明している。新婚生活を送る予定である新居の完成が、彼らによるストライキ続きのために、まったく目途が立たなくなっていたからである。

ジュリアン・ウェストが選んだイーディス・バートレットも、同じく富裕階級に属している。彼が彼女について具体的に述べていることはじつはあまり多くはなく、容貌や体型についてはほとんど述べていない。したがって、読者はいくつかの記述からそれを推測していかなければならない。たとえば、兄のお墓参りをした戦没将兵記念日の彼女は、「その日のために特に身につけていた喪服が、清らかな彼女の容貌をいちじるしく引き立たせ」(LB45)、きわだって美しかったと述べられている。また、彼が今住んでいる家でなぜイーディスと暮らせないか、なぜ新居を建てる必要があるかについて、彼は彼女について以下のように述べている。

わたしが住んでいた家は、わたしの家系の 3 世代の人間が住んできたものだが、わたしがその直系でただひとりの生きている代表者だった。大きな古い木造の邸宅で、内部は古風でひじょうに気品のあるものだったのだが、家がある地区はずっとまえからアパートや工場が侵入してきていたために、住む場所としては望ましくなくなっていた。そういう家に花嫁を、ことにイーディス・バートレットのようなきゃしゃな花嫁をつれてくるなどということは考えられなかったのだ。(LB46)

当時は、アメリカの工業化とともに大量に流入してきた移民たちが、伝統的なアメリカ社会に大きな脅威を与えていた時代であった。彼らは旧移民と違い、アメリカ社会に同化しにくいと考えられていたからである。ベラミー自身の故郷、チョコピー・フォールズ——牧歌的アメリカを偲ばせる典型的なスモール・タウン——も、工業化と移民の波により、紡績工場とそこで働く移民たちのスラムからなる町に変貌を遂げ、古き良きアメリカの社会の倫理的枠組みが徐々に浸食されるという事態が生じていた。それは、Milton Cantor が "The Backward Look of Bellamy's Socialism"² のなかで言及している現象であるが、上記引用にある「アパートや工場が侵入してきていた」風景とは、まさにそのような現象を示唆する不吉な記号にほかならない。

そしてイーディス・バートレットは、異なる「国民」と呼ぶべきほどに「階級」的な差異を示している労働者が、あたかも人種的に異なる移民であるかのように「侵入」してきた地区には住めない「きゃしゃな」女性として表象されているのである。そのような「きゃしゃな」女性として、また「喪服」によりその美しさが引き立てられる「清らかな容貌」の女性として描かれるイーディスは、まさにヴィクトリア朝の文化が理想としていた女性であったことは間違いないだろう。

イーディス・バートレットの服装はどのようなものであったろうか。それについても直接的な言及がなされているわけではない。しかし、彼女と婚約していたことを読者に告げる彼が、たとえば次のように述べている場面がある。

あの時代には、金だけがこの世の中の快適な洗練された事物のすべてを自由にできた時代だったから、女が求婚者をもつには金持ちでありさえすればよかった。しかし、イーディス・バートレットはまた美しく上品でもあった。(LB41)

ここには、19世紀末の階級社会における結婚がなにを基準として成り立っていたかを示す鍵があからさまに指摘されている。すなわち、求婚者である男性は女性の愛情を求めて、あるいは自分の愛情を注ぐ対象を求めて結婚するのではない。体面の保てる生活、快適で洗練された生活を保障する基盤である財産を獲得するために結婚するというのである。また、女性は配偶者を選ぶのではなく、配偶者に選ばれるのを待つだけの受動的な存在なのである。

しかし、ジュリアン・ウェストは、イーディスの魅力は財産とは別のところに、すなわち「美しく上品でもあ」ところにあると言っているのである。そのように語ったあとで彼は、なぜか、「上品」という点については20世紀の人にはなかなか認めてもらえないだろうと述べている。

この点は婦人の読者から抗議をうけるだろう、ということも私は承知の上である。ご婦人方の声がきこえる——「その方はきれいだったかもしれませんが、上品ではなかったはずですよ。あの時代の流行の衣装を身につけていらしたのではね。高さが1フィートもある目まいのするような構造物を頭にかぶって、人工の仕掛けでもって信じられないほどうしろの方をおしひろげたスカートをはいていたんですから、それ以前の服装屋が考えたどんなものよりも、完全に非人間的なかつこうでしょ。そんな衣装をつけていて上品な人なんてあるかしら！」(LB41)

この物語は、100年のタイムスリップをした19世紀の人、ジュリアン・ウェストが、20世紀の読者に向けて書いているという体裁をとっているので、「婦人の読者」とは、この小説が発表されたときにはまだ未来であった20世紀末の女性のことである。彼女たちが述べる「高さ1フィートもある[中略]構造物」とは、奇抜な形に結い上げた髪や、人目を引くための装飾性のたかい帽子であろう。スカートのうしろの方を押し広げる「人工の仕掛け」とは、鯨骨で作ったフープやバスルのことである。

おそらく19世紀末の「上品な」女性であったイーディス・バートレットは、「高さが1フィートもある目まいのするような構造物を頭にかぶって、人工の仕掛けでもって信じられないほどうしろの方をおしひろげたスカートをはいていた」のであろう。20世紀末の女性がそれを「完全に非人間的なかつこう」と批判的に評しているところには、もちろん1世紀におよぶ時間の推移がもたらしたファッションの趣味の変遷ということがあがあるが、それだけではない。

ジュリアン・ウェストがその批判について「承知の上」と述べているのは、彼が19世紀のフェミニストによる女性の服装改革運動を意識していたためであると想像できるだろう。たしかにアミア・ブルーマーにはじまるさまざまなフェミニストたちが、男性が鑑賞する対象としての女性ではなく、家庭という狭い空間を出て活動的な生活をおくろうとする女性たちのために、そのような運動を進めていたのである。すでに1850年代に、ブ

ルーマーは、すそを絞り、ゆったりした幅のあるズボン（ブルーマーズ）と短いスカートの組み合わせを普及させようとしたし、1880年代になると、自転車に乗る女性たちのために、テーラード・ジャケットと白いシャツ、キュロット・スカート（*devided skirt*）などが考案された。

少し時代がくだるが、先ほど名前をあげた C. P. ギルマンは、自身で発刊し自身で全記事を執筆した『フォアラナー』（*The Forerunner*, 1909-16）という月刊ジャーナルのなかで、当時のファッションを痛烈に批判する記事（「ドレス」）を連載してもいる³。女性のファッションは、19世紀の後半、すでに女性をめぐるイデオロギーが先鋭的に対立する場だったのである。

【イーディス・リート】

19世紀末のイーディスは、その容貌や言葉が記されていないのにたいして、20世紀末のイーディスは、その容姿や言葉が、新しい時代を代表するものとして明示されていると言っていだろう。はじめて会ったイーディス・リートについて、ジュリアン・ウェストは次のように述べている。

娘の方は、ようやくおとなになったばかりという年ごろだが、わたしがいままでに見たこともないほど美しい女の子だった。その顔は、濃い青色の目と微妙な色合いの肌と完全な目鼻立ちとでつくりうる最も魅惑的なものだったが、しかしたとえ彼女の容貌が特別の魅力を持っていなかったとしても、その姿の非のうちどころのない華麗さゆえに、19世紀の婦人たちのなかにあっても美しい女性として通ったことであろう。この愛らしい人のなかでは、女らしい柔和さと繊細さが、健康と豊かな肉体的活力を示す外見と、気持ちよく結合していた。わたしが彼女との比較にもちだしうる娘たちには、この健康と肉体的活力とがあまりにも欠けていたのだったが。（LB58）

イーディス・リートのなかに認められる「女らしい柔和さと繊細さ」は、道徳の守護神としての、自己犠牲をいとわずに家族に憩いの場を用意する「家庭の天使」としての女性像、つまり19世紀的な女性像に通ずる性格といえるだろう。実際、20世紀末のイーディスは、タイム・スリップによるアイデンティティの混乱に苦しむジュリアン・ウェストをやさしく見守り、その苦悩を和らげることに喜びを感じる女性である。20世紀末の世界へ到着して2日目の朝、ジュリアン・ウェストはボストンを歩き回り、過去と現在の狭間に落ち込んでしまったような無力感や絶望を感じて声をあげて泣くが、そのときにイーディスが差し伸べる手に、「奇跡をおこなうある種の霊薬の効果」（LB80）を感じる。そして、彼女のことを「天使の役割を演じてくれたこのやさしく愛らしい娘」（LB135）と呼んでもいるのである。

こうして、ジュリアン・ウェストの「心労」とイーディス・リートの「同情の涙」がふたりを近づけていくが、ふたりの愛情表現は、19世紀後半の急進的なフェミニストたちが主張した理想的な男女のあり方と比べるときわめて保守的なものである。イーディス・リートは彼への熱い思いを自分から打ち明けることには恥じらいを感じ、彼が激しい恋心を打ち明けると頬を赤らめ、動揺を隠せない様子を見せる。Sylvia Strauss は彼女を 19

世紀的なコケットだと評しているが、たしかに彼女の行動には急進的なフェミニスト的特徴はみじんも見られない⁴。

しかし彼女が 19 世紀末のイーディスと決定的に違うのは、「健康と豊かな肉体的活力を示す外見」である。コルセットなどで体型が「女性的」になるように矯正されていた時代、屋外で活動するのが男性または女性労働者だけであった時代には、健康的な豊かな肉体は上流階級の女性のものではなかった。女性たちは、父権的イデオロギーから解放されることによって、はじめて伸びやかな肉体を手に入れることができたのである。ベラミーは、20 世紀の教育課程においては学問と同様に体育が重視されており、イーディスをはじめとする 20 世紀の「清らかで生き生きとした娘たち」は、「各人の肉体と精神とを可能なかぎり最高度に発達させる」(LB164) ことを求める教育の産物であると述べている。

結論的に言うと、イーディス・リートは、19 世紀的精神と 20 世紀的身体の「結合」した存在として描かれているのである。それは、物語にラブ・ロマンスの筋立てを用意するために必要な人物造形だったのかもしれないが、それ以上に、19 世紀の急進的なフェミニストたちが提示していた女性像にたいして批判的なベラミーの女性観を暗示するものであったのではないだろうか。このことを検討するために、19 世紀アメリカのフェミニズム運動の動向を概観しておきたい。

【19 世紀アメリカの女性問題】

Sylvia Strauss は、「Gender, Class, and Race in Utopia」において次のように述べている。

ベラミーの『かえりみれば』が出版された 1888 年、「女性の問題」は 19 世紀の進歩が 20 世紀において維持されうるかどうかの鍵と見なされていた。「女性の問題」は、科学者、哲学者、エッセイスト、小説家そして政治家を夢中にさせていたのである。私たちの意見はかつてないほどのスケールで人びとの傾聴を集めていた。男女いずれの社会改革者たちも、女の領域は拡大されなければならない、という観念的かつ実際的な道理に賛成していた。他方、保守的な人びとは、文明の維持はその点にかかっているのだと強く信じて、女たちを伝統的な家庭の領域に閉じこめておく誘因を探していた。⁵

独立戦争を戦っていたころのアメリカには、公德心と神と国への愛を子どもに教育することこそ女性の義務であるとする「共和国の母」というイデオロギーがあった。また、1820 年代から 30 年代にかけて、女性の道徳的優越性を確信するエマ・ウィラードやキャサリン・ビーチャーなどの女性教育者たちが学校を創設し、「共和国の母」というイデオロギーに加えて、教育ある女性が、妻、母、教師として社会に影響力を持つべきだという思想を社会に広めていた。そのような中で、19 世紀における「女性の問題」についての議論は、1830 年代に既婚女性の財産権をめぐるはじまる。それ以来、1850 年代にかけて、既婚女性の財産権についてさまざまな議論がなされることになるが、これは女性が自分たちの市民権について考えるきっかけを作ったのである。

いっぽう同じころに、ミドルクラスの女性たちは、福音主義的改革運動として、禁酒運動や奴隷制廃止運動、売春の廃止を求める道徳改善の運動、上流階級の女性は慈善運動な

どに参加しはじめる。また、工業化にともない増加する労働者階級の女性は、労働条件の改善や文化的な生活などを求めて、労働者の組織化に着手しはじめる。こうして社会全体で活発化しはじめた女性の動きを象徴するものが、1848年におけるセネカフォールズでの「女性の権利宣言」である。

われわれは以下のことを自明の真理と考える。すなわち、すべての男女は平等に創られ、その創造主によって一定の譲り渡すことのできない権利を与えられており、それらの権利には生命、自由および幸福を追求する権利があるということである。（「女性の権利宣言」ニューヨーク州セネカフォールズ、1848年7月19-20日）⁶

独立宣言をもじったこの宣言は、女性が公的活動に男性と同等の立場で参加することを求めたものである。これは、キャサリン・ビーチャーなどのドメスティック・フェミニズムの人びとが唱えた教師や母としての女性の影響力という間接的な政治参加に飽き足りない人びとが、政治的、経済的に女性が男性と同等の立場に立つことを要求したものとして、急進的な女性運動の中核的理念となっていく。

このセネカフォールズの集会には、男性の奴隷制廃止論者たちも参加していた。当時の男性の改革運動家の多くは、女性の社会進出はもとより、公の場での女性の意見発表をタブー視していた当時の社会から反感を持たれることを恐れて、女性運動家たちとかかわることを好まなかった。女性の組織と組むことによって、自分たちの主張を聞いてもらう以前に、社会の反感を買うことになってしまうからである。そのような中で、女性と手を組んで人権の問題に取り組んだのは、急進的なギャリソン派の奴隷解放論者たちだった。

しかし1860年代に入ると、女性運動にたずさわる人たちは黒人男性の参政権をめぐる対立を深め、ふたつのグループに分裂する。原因は、南北戦争後、憲法修正14条が黒人男性にのみ市民権を認めたことにあった。アメリカは、憲法修正14条に女性の権利を入れることを拒否したのである。エリザベス・ケイディ・スタントンは、「アフリカ人は男性だけで構成されている人種だとお考えですか」と、怒りをあらわにする。女性たちの絶望は一様であったが、その後の対応の仕方は二分される。

Sylvia Straussによれば⁷、スーザン・B・アンソニーとスタントンを含む人たちが、修正14条は撤回されるべきだと考えたのにたいして、ルーシー・ストーンらは、今は黒人の参政権を成立させることを優先し、女性の参政権については時節を待つべきであると主張したからである。こうして女性参政権運動はふたつに分裂する。アンソニーとスタントンの急進的な一派は、全米女性参政権協会（NWSA）を結成し、女性参政権運動を断固押し進めると同時に、自由恋愛などヨーロッパから輸入された過激なアイディアも進んでとりいれようとした。

他方、今回は時節を待とうとした人たちはアメリカ女性参政権協会（AWSA）という組織を結成したが、こちらは自由恋愛に反発し、労働者階級の女たちとも連合しようとするNWSAを不信の目で見ている。AWSAは「上品で博愛的なことを重視」した活動を行ない⁸、「ベラミーが具体化したアメリカの理想や価値観に同調」し、近い将来に女性参政権が得られないとわかった以上、「女性にとってのよりよい明日」⁹を提示したベラミーに関心を向けることにしたのである。要するに、ベラミーは、フェミニズムについては、

急進的ではなく穏健な立場をとっていたということなのである。

【女性と仕事】

以上のような 19 世紀のフェミニズム的動向が『かえりみれば』における女性像に反映していることは言うまでもないだろう。たとえばジュリアン・ウェスト自身、イーディス・リートの「清明かつ純真な率直さ」に感銘を受け、「わたしがこれまでに知っていたどの少女よりも、むしろ汚れをしらぬ気高い少年の率直さに近いもの」であると言ったうえで、その魅力的な特徴は、どこまでが彼女独自のもので、どこからが 19 世紀末以降におこった「女性の社会的地位の変化の結果」(LB184)なのか、と考えているからである。

19 世紀の有閑階級に属するジュリアン・ウェストは、食事、洗濯、掃除などの家事が国家により集約的かつ効率的におこなわれているのを見て、「女性は自分の魅力や美点をのぼすこと以外に仕事がない」(LB184)のではないかと考える。だが、家事から解放された 20 世紀末の女性たちは、「社会を美しく飾ってくれることのお礼」として男性たちが提供してくれる安逸な暮らしには満足せず、「もっと快くてしかももっと有効な方法で共同の福利に貢献」(LB184)するために産業隊の構成員となり、産業隊の隊員として労働することによって 19 世紀末の女性よりはるかに健康で幸福になっている。

「いまの女性がすばらしく健康的であるのは、健康的で元気をふるい起こさせるような仕事をみんなが同じように与えられているという事実を負うところが大きい」(LB185)とドクター・リートは説明している。それに比べて、19 世紀という「時代の文明の犠牲者だった」女性たちが不幸だったのは、「結婚によって発展を止められ」たために「退屈で未発達な生活」を送らざるをえず、「風通しのよい戸外の人間の世界へ逃れることができず」、「精神的には個人的関心の範囲が小さい」ために狭い視野しか持てなかったからである。「そういう生き方をしたら、男だったら頭が鈍くなるか、間違いになっていただろう」(LB186)と、彼は言っているのである。

また、女性は、労働することによって身体的な健康を得たばかりではない。経済的自立をも獲得したのである。19 世紀の女性たちは、生計の手段をひとりの男性に依存していたがために「個人の自由と尊厳」(LB188)を奪われ、「最大限の個人的屈辱感」(LB189)を味わう立場に置かれ、当時の経済システムのもとでは、どうしてもその立場から逃れることができなかった。結婚によって女性が男性に扶養されることについて、「恋愛結婚の場合には、互いに引き合う自然な力のおかげでしばしばその依存も耐えうるものとなったかもしれない」が、「結婚の形式をとろうとするまいが、女性が生計を得るために自分を男に売らねばならなかったような無数の場合には、この問題はどうなっていたのだろうか？」(LB207)と、ドクター・リートは問いかけている。

それにたいして、20 世紀末の社会は、国民が提供する労働により作られた資産を共同の資産として蓄積し、子どもから老人にいたるまでの国民全体が、男女の区別なくその共同の資産を享受する仕組みを作ったのである。「男が自分たちだけで世界の全生産物を占有して、女性にその分け前を乞い求めさせることは、残酷であるのみならず盗賊行為ですらある」(LB207)と、ドクター・リートは告発している。女性の無能力の根源が男性にたいする経済的依存にあるとするならば、「国民が現在の組織化された生産と分配の体制をうけいれるための機が熟す以前には、女性の地位の急激な改善は不可能」(LB189)で

あるというのがベラミーの認識であった。

【性による差異】

こうしてベラミーは、女性が男性と同じように産業隊の隊員として働くことで、健康と経済的自立とを獲得している世界を作りあげたが、しかし彼のユートピアの特徴は、男女間の生物学的な差異がつねに配慮され、「女性の労働に対しても、各人にそれぞれが最も適応している仕事を与えるという原理が守られている」(LB185) ところにある。すなわち、「女性は、種類についても労働の程度についても完全に女性にむいた仕事以外につくことは許されない」(LB185) のであり、男性が重労働を課せられるのにたいして、女性は軽い労働を負担するだけで済み、労働時間と休暇の度数についても優遇される。休養が必要なときは注意の行き届いた設備が用意されている。

したがって、女性は男性と同じ産業隊に所属しているわけではないのである。女性は、「男性の産業隊の不可欠な一部をなす」のではなく、男性の産業隊の「同盟軍」(LB185) を構成しているのである。この女性の産業隊は、完全に女性だけの管理機構のもとにおかれており、総司令官以下の高級役員も全部女性であり、男性が大統領以下の役員を選ぶのと同じ方法で選出される。そして、女性の総司令官は大統領の内閣の一員として、「女性の労働にかかわる措置については拒否権を行使して国民議会に上訴することができる」(LB186)。しかし大統領になるのは男性であり、彼女が大統領になる可能性はない。

ドクター・リートは、「両性のはっきりとした個性を認識することにいさか欠けていた点が、あなたの時代の社会の無数の欠陥の一つだったのです」と述べ、「あなたの時代の一部の改革者が一見努力を傾けていたように、性による差異をなくすことではなく、むしろその差異をいかに発揮させることが大切なのです。あなたの時代には男との不自然な競争に甘んじないかぎり女にとって出世の道はなかったのです」(LB186) とつづけている。そしてさらに、今日の女性たちは「競争も野心も出世もある女性だけの世界」を与えられ、「その世界にあってきわめて幸福」(LB186) なのだと述べている。

要するに、ベラミーのユートピアは、19世紀末の「一部の改革者」、すなわち急進的なフェミニストたちがめざしていた、いっさいの「性による差異」が消去されている世界ではないということである。本論であらかじめ指摘したように、イーディス・リートは、19世紀的精神と20世紀的身体の「結合」した存在として描かれているが、それはたしかに、19世紀の急進的なフェミニストたちが提示していた女性像にたいするベラミーの批判を暗示するためのものだったのである。

その意味において、ベラミーは保守的な社会改革者ということになるだろう。ベラミーが女性の産業隊の説明に使った考え方は、生物学的な男女の差異を文化的な男女の領域分化に反映させる考え方、つまり女性には女性に向けた領域があり、その領域内でのみ女性独特の力を発揮するべきだという本質主義的な考え方に通じているだろう。

もちろん、女性にたいする文化的な抑圧の存在さえ十分に認識されていなかった19世紀末の人びとにとって、ベラミーが描く20世紀末の社会は、女性の地位向上という革新的な出来事、幸福な未来の実現可能なプランと考えられたことであろう。キャサリン・ビーチャーのドメスティック・フェミニズムは、まさにベラミーと同じ立場なのである。女性は、良き母、良き教師となることにより正しい道徳的判断ができる子どもを育て、道徳

的にすぐれた家庭を築くことにより、社会全体の改革に貢献するべきであり、女性が参政権を行使して直接行政にかかわる必要はないという立場なのである。

『かえりみれば』には、ベラミーの女性観の保守性が、端なくも露見しているかに見えるテキストの細部がある。ドクター・リートが、今日の男たちは、「最大の生きる喜びや努力への主たる刺激が女性の美しさや気品のおかげで得られる」と十分に認めており、「肉体的な活力が最大限にあるあいだはそれぞれの力にかなった労働をある程度規則的に要求する方が肉体のためにも精神のためにもよい」と十分に理解している、だからこそ「そもそも女性が働くことを許している (they permit them to work at all)」（LB185）と述べている箇所である。

男性が評価する女性の性質がその「美しさや気品」であり、それによって男性が刺激を得るために女性の労働を「許している」という立場は、女性の労働そのものに価値を見出している立場ではないし、仕事をする権利を女性が生来的に持っていることを認めている立場でもない。それは社会改革的なユートピアにはあまり似合わない保守的な男性の意見であり、19世紀末の急進的なフェミニストでなくても、女性にとっての理想的な社会とはあまりにかけ離れていると感じる、むしろディストピア的な社会のヴィジョンなのではないだろうか。

『かえりみれば』の保守性を示すもうひとつのテキストの細部をあげておこう。ジュリアン・ウェストが、女性が産業労働隊員として働き、隊のなかで出世したいという野心を持つと、結婚をためらうようになるのではないかと、ドクター・リートに尋ねる場面である。すると、ドクター・リートは、「女子産業隊の高い地位は妻であり母でもある女性のみ委ねられます。そういう女性だけが女性という性を十分に代表するものだからです」（LB187）と答え、さらに「この国の子どもたちを生き育てること以上に国民の感謝を要求しうるような奉仕が考えられますか？」（LB188）と、質問を返すのである。

妻であり母であることが、女性という性に求められる要件であるというこの考え方は、子どもを産み育て、自己犠牲によって家族に献身的な愛を注ぐ「家庭の天使」こそがあるべき女性の姿だと考えるヴィクトリア朝的女性観と変わるところがない。女性の最高の価値または機能は子どもを生き育てることであるから、子どもを持たない女性は这个世界では一人前と認められない、ということである。女性性は生殖という点でのみ評価され、その能力のゆえに女性は人間としての権利を与えられるのである。

産業隊の隊員である女性は、「母としてのつとめを果たすために必要な場合にだけ除隊」（LB184）し、「母性が女性の頭を新しい関心で満たすときにだけ、一時的にその女性は世間からひきさがる」（LB187）が、その他の時期は産業にかかわっているという。女性の本性 (nature) は育てること (nurture) であるとする19世紀的概念を維持したまま、ベラミーは女性を家事から解放し、仕事に参加させている、仕事に参加することを「許している」ということになるだろう。

【おわりに】

ベラミーは1886年のシカゴで起こったヘイマーケット事件に大きな衝撃を受ける。アメリカで最初のメーデーが行なわれた直後、労働者がヘイマーケット広場で開催していた8時間労働要求の集会に警官が干渉しようとしたとき、何者かが爆弾を投げこみ、一部の

警官が死傷した事件である。この事件をうけて、「大切にしてきた価値観を破壊されつつある中産階級の男女が共感できる新しい社会秩序」を構築するために、彼は『かえりみれば』を書きはじめたのである。

労働者階級の台頭にたいする危機感から、この小説のなかでは、マルクス主義的な革命も過激な社会改革も疎んじられ、当時の穏健な女性運動家たちが追い求めていた夢、つまり、女性が家事から解放されることと、女性が経済的に自立していることだけが実現されている。急進的なフェミニストたちが奨励する自由恋愛にも、女性労働者との連帯という問題にも、ベラミーはまったく触れようとしない。そのような保守的な態度は、たしかにこの著作をベストセラーにし、人気を沸騰させる一因になったと言えるだろう。しかしそれは同時にその人気を永続的なものにしなかった原因でもあったと言えるであろう。

註

*1 Edward Bellamy, *Looking Backward: 2000-1887* (Penguin Classics, 1986), p. 44.

以下、本文中の引用は、本文中に括弧で LB と記した上で、引用のページ数を数字で示す。また、和訳については『アメリカ古典文庫7 エドワード・ベラミー』中里明彦訳（研究社、1975年）を大幅に参照させていただいたが、同時に、字句を適宜変更させていただいた。記して謝意をあらわしたい。

*2 Milton Cantor, "The Backward Look of Bellamy's Socialism", *Looking Backward, 1988-1888 :Essays on Edward Bellamy*, ed. Daphne Patai (U of Massachusetts P, 1988), pp. 21-36.

*3 Charlotte Perkins Gilman, "The Dress of Women", *The Forerunner*, vol. 6 (1909), pp. 20-25, 46-51, 75-81, 102-108, 132-138, 159-165, 189-194, 215-220, 245-250, 273-278, 302-307, & 328-334.

*4 Sylvia Strauss, "Gender, Class, and Race in Utopia", *Looking Backward, 1988-1888 :Essays on Edward Bellamy*, ed. Daphne Patai (U of Massachusetts P, 1988), p. 81 ("Yet coquettish is an apt description of Edith Leete.").

*5 *Ibid.*, p. 68.

*6 サラ・M・エヴァンズ『アメリカ女性の歴史 第2版 自由のために生まれて』小倉山ルイ他訳（明石書店、2005年）、p. 161.

*7 Strauss, *op. cit.*, pp. 68-69.

*8 エヴァンズ、前掲書、p. 206.

*9 Strauss, *op. cit.*, p. 69.